



## 西千葉から六本木、そして駒場へ

東京大学名誉教授 (元第1部教授)

根 岸 勝 雄

1949年、私が第二工学部の2年生のときに、西千葉キャンパスの正門に、東京大学第二工学部の門標と並んで生産技術研究所の門標が掲げられた。以来50年を経て、やっと念願の新研究棟が駒場地区に完成しつつあることはまことに御同慶の至りである。この間、年移り、人変わり、二工の卒業生が生研から姿を消してすでに久しい。そこで当時の状況の一端を述べてみたい。

私は1948年に第二工学部物理工学科に入学した。この学科名は当時としてはきわめて斬新なもので、同級生の多くがその名前にひかれて受験したことを告白している。物理工学科は二工にしかなかったが、もともと一工と二工にはほとんどの学科が重複して置かれており、入試も合同で行われて、学力が平均するように両学部で学生を配分したので、心ならずも西千葉にきた学生が多かった。また、第二工学部の名が夜学と誤解されたこともしばしばあった。そのため、私の学年でも入学後しばらくして本郷復帰運動が起こったが、先生方の熱心な説得もあり、まもなく沈静化した。しかし、これは姿を変えて本郷に対する良い意味の対抗意識として残ったように思う。このような意識は、本郷から離れて新天地にやって来た教官層の開拓者精神とともに、二工から生研へと受け継がれて来たように思う。

1949年に生研が発足したときは、私は学生の身分であったから、当時どのような経緯で第二工学部から生研に移行することになったのかは知る由もなかった。第二次大戦中に高級技術者の養成を目的として西千葉の広大な土地に増設された第二工学部は敗戦によってその目的を失ったとされ、1951年3月、私達の卒業とともに正門の門標も下ろされた。(旧制大学は3年制である。)しかし同年4月から、旧制高校卒業者を対象とする工学部分校が生研に併設され、1954年まで継続した。

後に知ったことであるが、戦時中に軽視されてきた法文系学部からの強い講座返還要求に抗し、戦後日本の復興のために生産技術の重要性を説いて、二工時代の教官定員を大幅に削減しても、生研を発足させた先輩諸先生方の決断と卓見は見事であったと思う。実際に、その後しばらくして、工学部の学生定員は社会的要請に応える形で大幅に増加している。

私自身は学部を卒業して大学院に進んだ。二工はすでにないのであるから、名目上は工学部(本郷)の大学院ということかも知れないが大学院の入学許可証も修了証書も貰った記憶がないので判然としない。大学院としての授業もなかったが、育英会奨学金はきちんと貰って、西千葉の生研一部鳥飼研究室で超音波の勉強に5年間を過ごした。1956年、奨学金の期限切れとともに、(財)小林理学研究所に移った。

1965年に助教授として生研に戻ったが、その間に生研は西千葉から六本木に移っていたので、私は移転の苦労を経験していない。そして1988年の定年までを生研で過ごした。この間、大学附置研として最大規模の生研は絶えず外圧にさらされ、その存在意義を問われ続けてきた。これが、所員の緊張を生み、各個研究を尊重しながら、部門を越えたプロジェクト研究にも柔軟に対応できる生研として、高い評価を得るに至ったものと思う。キャンパス計画も立川、柏、六本木と二転三転し、創立50周年にしてようやく駒場Ⅱキャンパスに自前の建物が新築されつつある。移転は大変な労力を要する作業であるが、円滑に進むことを願っている。

おわりに、私が民間研究所に居たときに、辛口で鳴る某先生が残した研究所についての辛辣な警句を呈しておきたい。

「研究所は建物が完成したときから衰退期に入る」

これは警句であり、法則とはいえないが、思い当たるところもある。生研は絶えず自己改革を続けて、50年にわたり高い評価を得てきた。今後とも、生研が上の警句の例外であり続けることを念願している。